生涯学習を見すえた読書の在り方
～よりレベルの高い読書教育へ～

足利市立南小学校
教諭　内田仁志

序章

（１）本稿の目的

本稿は表題にもある通り、生涯学習を迎えた現代に読書はどのような形で存在したらよいかを探ることを目的にしている。

最近、朝の１０分間読書等、読書に関する取り組みが積極的に行われている。また、『ハリーポッター』のシリーズ等もベストセラーになり、読書への関心が高まってきたように思われる。しかし、不思議なことに秋の読書週間の時期には毎年のことながら読書離れが指摘されているのである。

ここで素朴な疑問なのだが、果たして現代の子供にとって読書は必要なものなのだろうか。また、必要というのならその必要性はいかなるものなのだろうか。

（２）本稿の概略

本稿は読書は本当に必要なのかを検証することからスタートした。まず、現代の子供の読書の実態を探ってみる。ここでは読書に対する惨憺たる実態が明らかになる。その原因は何か。また、そのような現実を前にしても果たして読書は必要なのだろうか。読書でなければならないのか、ということを検証していくことにする。サブタイトルでも掲げたが、「よりレベルの高い読書指導へ」ということで、単に娯楽だけではなく、生涯教育にわたって役立つ読書の在り方を探ってみたい。

なお本稿はページ数の関係で詳しく論述していない箇所も多い。本稿で論述できていないところは今年度の足利市教育会研究紀要第４５号に詳しく述べているのでそちらを参照していただきたい。

第１章　読書の実際

（１）子供の読書の実際

それでは子供の読書の実態を見てみよう。以下に示すデータは平成１６年度の栃木県のデータである。[*1] データは小学５年生、中学２年生、高校２年生のものであるが、本稿では、筆者の勤務している学校の都合上、小学５年生だけを対象とする。

まず平日の過ごし方である。読書をすることが多いと答えた児童は１．８％である。ちなみに一番多いのは「部活動やサークル活動をする」で２３．４％、「宿題や勉強」が２１．２％で続いている。部活動や勉強は余暇の過ごし方とは言えない部分もあるので、（外出を除く）遊び的な過ごし方と比較してみよう。一番多いのは「ゲームで遊ぶ」１３．２％であり、テレビは６．９％、「体を動かす」が５．９％となっている。ちなみに休日になると読書は２．６％と微増している。この調査から結論づけられることは次の３点である。

第一に、子供は読書をしていないということ。帰宅してから読書する子は５０人に一人しかいない。

第二に、余暇の過ごし方は室内ではテレビやゲームなどの視覚的な遊びが主流になっていること。

第三に、子供の余暇の過ごし方は室内ではなく遊び、買い物、食事など、外出することに移っていることである。

このように現在、余暇に読書をする子は極めて少数派となっている。この結果は一ヶ月に読む本の冊数にも表れ「０冊」と回答した子供は９．８％、「１～３冊」と回答した子供は４８．８％である。[*2]

（２）結論として　―今の子供にとっての読書とは―

上記のように子供の本離れは明らかである。しかし、不思議なことに「本を読むことは大切だと思うか」という質問には「とても大切」「やや大切」という回答が８割を超えているのである。

このことから次のことが結論づけられる。子供は読書が大切だと思っている。しかし、なぜ大切であるかは理解していないし、読書していないことが深刻なことだとは思っていない。その証拠に家族との話でもテレビ番組が話題にのぼることはあっても読書が話題にあがることはない。

今の子供にとって読書という行為は極めて珍しいことである。なぜなら学校という空間なら読書という行為は普通に見かけられることであるが、学校を離れてしまうと、読書する子供は極めて少数派となってしまう。さらに本以外のツールがあふれているのに、本をたくさん読んでいたりすると、変な人間だと白眼視されたり、暗い人間だと馬鹿にされたり、付き合いにくいやつだと思われかねない。[*3] したがって生徒が何の外的な要請も受けずに読書を趣味とし、本を読むという行為を積極的にすることは望めないだろう。

それではこのような子供の社会的背景をふまえ、これからの読書指導はどのようにしたらよいかを検討してみる。

第２章　今後の読書指導

（１）本を読む価値は何か

上述したように読書は子供が自ら進んで行う行為ではないということである。香西秀信氏は子供の読書離れの原因を次の二つに分類している。[*4]

第一は、読書の技巧化の問題である。読書で感動する。それは作者の技巧によって感動させられているのである。それらの技巧は今は読書以外の他のメデイアに応用され、読書よりもはるかに効果的に視聴者に届けられている。

第二に、作者の質の問題である。読書がかっては独占的な情報源だった時は才能ある人材が本を作る側に集っただろう。しかし今では、アニメ等に集中してしまい、本を作る側にはなかなかかってのような英才、鬼才が集まってこないのが現実である。

では現代においては読書は不要なものなのだろうか。他のメディアと比較してみよう。

テレビなど受動的な媒体は作り手のねらいに沿って視聴者の意志を自由に変えられるのである。「テレビは放送局の人が問題から答えまで全部考えてしまって、見る人には何も考え

ないですむように番組を作るからです。だから見ていて楽なのです。」[*5]

つまり映像が直接受け手の感覚に情報を届ける媒体であるのに比べ、本は受け手にまず文字という手段で情報を伝え、それを頭の中で整理するという過程を経るのである。

まとめてみよう。テレビなどのネット媒体は何の訓練もなしに情報を受け取ることができる。それが直接感覚に訴えるネット媒体の特徴である。しかし、本ではその言語表現によって構築された世界を、まず言葉の意味によってとらえ、読み手自身の想像の中で再構成するような形で受容するのである。[*6] これは訓練なし、つまり本を読む習慣ができていないとできない行為である。ここで「読書の定義」を明らかにしておく。

> （前略）ここでいう読書とは、文学作品を読むことに限らず、自然科学・社会科学関係の本や新聞・雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する本を読んだりすることを含めたものである。[*7]

ここで読書の定義が明らかになったようである。つまり「明らかな目的を持って本を読むこと」「知識情報の収集のために本を読むこと」ということだろう。ここで読書が「楽しむための」「娯楽としての」ものから情報を得る手段へと方向転換したことが明らかになった。決して「心を豊かにする」ための人間形成の手段としての役割は期待されていないのである。

（２）これからの読書の姿

以上のことからこれからの読書の姿は次のようになる。

第一に、読書は目的をもってすること。娯楽のための読書はますます少なくなるだろう。そしてこれまで読書とは見なされていなかった調べるために本を利用することが読書と見なされるようになる。必然的に文学的な本を読むことは減り、科学や図鑑等の読書数が増えるだろう。

第二に、文学的な文章についても漫然と読むのではなく、どうして作者はこのような行動を取ったのか、こう考える背景は何があるのか、また情景描写など、作者の技巧を読み取る読み方が求められる。本を読んで「面白かった」で終わりとせず、その面白さは何が原因なのか、どうして感動したのか、それを本から読み取り説明する能力が求められる。

第三に、音読が重要視される。それもすらすら読めるのは当たり前で、その描写に合った音読の仕方が求められる。

以上をふまえた実践例は足利教育会研究紀要第４５号に収録してあるので、そちらを参照していただきたい。

終章　よりレベルの高い読書の構築

発達した他のメディアの欠陥を補い敢えて読書に取り組む必要はなにか。それがこれからの国語教育に求められるのである。それが音読、背景描写など作者の工夫を読み取ること、そして文章の構成を理解し、それを自分の作文に役立てることだろう。さらに読むことの基底を述べて本稿の結びとする。

「読む」ことの学習指導の基底

どのように新しさを言おうと、

・表現の意図を意識しながら読むこと。

・自己と対照しつつ、自分自身の問題として読むこと。

・読む営みを通して自身の文体（話体）を形成していくこと。

などの点が忘れられてよいはずがない。（中略）その意味では、

・表現の意図を読み取る活動を行うこと。

・文章をもとに疑問を持ったり、自分ならこうするなどと考えたりする　こと。

・音読・朗読などを通して、文型やリズムを体にしみこませること。

などの学習活動が保障される必要がある。[*8]

今後、本以外の情報メディアは授業に大量に入ってくるだろう。しかし、我々教師は意図的に本と触れあう機会を児童に提供し、本を活用させなくてはならないのだ。上の読むことの基底を忘れず指導に取り組みたいものである。

(*1)「児童生徒の生活状況調査」、栃木県総合教育センター研究調査部、平成１６年３月。なお小学校５年生のサンプルは２６学校７７７人のものである。

(*2) 本を読むことは学年が進むに連れて減少している。しかし、小学校低学年の子供は本が好きでたくさん読んでいると思うのは早計なようだ。

「小学校時代の本好き読書好きというのには、実はトリックがある。その読書の多くが、児童書なのだ。現在の小学生の好きな本でいうと『ネズミ君』のシリーズさえも読書に数えられる。これは、完全な絵本だ。絵本に近いものや完全な子ども向けのエンターテインメントを冊数に数えても、大人の読書とはあまりに開きがあり参考にならない。」

齋藤孝、『読書力』、岩波新書、（２００２年）２００２年、３０ページ。

(*3) 三田誠広、『図書館への私の提言』、２００３年、勁草書房、９４ページ。

(*4) 香西秀信、「『読書』でなければならない理由は何か」、栃木県連合教育会、『下野教育　第６９６号』、平成十一年、七ページ。

(*5) 鈴木健二、『今、読書が日本人を救う　鈴木健二の「読書のすすめ」』、２００４年、グラフ社、５ページ。

(*6) 長尾高明、『鑑賞指導のための教材研究法　―分析批評の応用―』、明治図書、（１９９０年）１９９４年、７ページ。

(*7) 文化審議会答申、「第２　国語力を身に付けるための読書の在り方　１　読書活動についての基本的な認識」、平成１６年。

(*8) 三浦和尚、『「読む」ことの再構築』、三省堂、２００２年、１４ページ。

評

筆者が、児童生徒の実態や様々な資料から、読書を「文学作品を読むことに限らず、自然科学・社会科学関係の本や新聞・雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する本を読んだりすることを含めたものである」ととらえ、「明らかな目的を持って本を読むこと」「知識情報の収集のために本を読むこと」と定義されたこと、そして、読書が「楽しむための」「娯楽としての」ものから情報を得る手段へと方向転換したことを明らかにされたことは、卓見であると思われます。

また、これからの読書の姿として、「読む」ことの学習指導の基底と関連付けて、以下の３点を明らかにされ推奨されています。

（１）表現の意図を読み取る活動を行うこと。

（２）文章をもとに疑問を持ったり、自分ならこうするなどと考えたりすること。

（３）音読・朗読などを通して、文型やリズムを体にしみこませること。

いずれにしても、読書は、さまざまな情報を通して自分の経験を拡大し、自分の考えを形成し定着していく行為であり、読み手の目的に沿った主体的な活動であるだけに、放置したままでは養われないし、読書力も身に付かないと思われます。

そこで、計画的な読書指導を進めていく必要性が起ってきます。

小学校学習指導要領「国語」の各学年の目標によりますと、低学年では「楽しんで読書しようとする態度」を、中学年では「幅広く読書しようとする態度」を、高学年では「読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる」となっております。そこで、児童の発達段階を考慮しながら、国語科における読書の指導が他の教科における読書の指導や図書館における読書の指導と密接に関連付けられ、実践を通して成果を上げていくことが期待されます。